

説教余滴、2017年12月24日、メリー・クリスマス、

クリスマスの物語は、マタイ福音書、ルカ福音書にあります。神話的、牧歌的な描写が、大変美しく感じられます。神のみ子イエスの降誕記事は、この二か所だけなのでしょう。

大伝道者パウロは、ガラテア書4:4に短く、印象的な降誕記事を書き残しました。今夜の燭火礼拝でお話することになっています。

大変有名な降誕記事があります。それは、ヨハネ福音書1:1~18です。

- 1、初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
- 14、言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

言(ことば)はギリシャ語で「ロゴス」です。思想・意志の表現としての言語を指します。言葉であり、語られた内容、そこから福音のメッセージを意味するようになりました。理性、道理、とも訳されます。罪人に対する神の意志が、ロゴスです。罪人を救う神の意志の具現化が、ロゴス・イエスになりました。この方に対してどのような態度・姿勢を取るのか、常に問われています。

ヨハネ福音書3:16は、もう一つの降誕記事であり、その意味をはっきりさせてくれるものと考えます。大変有名な聖句、人の心をとらえ、生き方を変え、導き、守る力に満ちています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

英国のス波尔ジョンは、この聖句を100回以上も説教しました。それでも語るべきことを語りつくしていない、と言ったそうです。あるアメリカ人宣教師は、「一番、大事な聖句はどれでしょうか、と問われて「やっぱり、ヨハネ3:16でしょう」と答えられました。この言葉に生かされ、動かされ、敗戦国日本へおいでになりました。